伝説的な1993年のスーパーボウル・ハーフタイムショーにおけるパフォーマンス。これ以降、同イベントは人気アーティストの出演が定番になった。写真＝Getty Images

Part 1

終わらない革命

衝撃的な死から17年。ポピュラーミュージックに
革命をもたらしたマイケル・ジャクソンのレガシーは、
今もなお多くのアーティストやパーフォーマーたちに継承されている。

2009年6月26日からのマイケル・ジャクソン

西寺郷太（ミュージシャン、洋楽解説者）

2009年、最後のリハーサル映像を収めた映画『THIS IS IT』の大ヒットなどにより、世界はマイケル・ジャクソンを「堕ちたスーパースター」から「早逝の天才」へと神格化した。「あのとき」と「それから」を、日本屈指のマイケル研究家、西寺郷太（NONA REEVES）氏が綴る。

2009年7月7日、マイケルの公開追悼式の会場、ロサンゼルスのステイプルズ・センターの前に設置され、ファンの寄せ書きで埋め尽くされた壁画。写真＝Getty Images

1 2009年6月26日

マイケルの訃報が日本に届いたのは、2009年6月26日金曜日の朝のことだ。たいていの資料には「2009年6月25日」と記されているが、それはあくまでも彼が暮らした「アメリカ合衆国」の日時。あの朝に始まり、そこから数カ月続いたぐるぐると回転する洞窟の中へ落下していくような衝撃は、今も鮮明に覚えている。思い返せば、17年も前のことだ。

当時、30代半ばだった僕は、TBSラジオでその春に始まった平日午後の帯番組『小島慶子キラ☆キラ』に出演し、水曜日の音楽コラムを毎週担当していた。自分の個性である「80年代音楽フリーク」を強調する意味も込めて、ロンドン「O2アリーナ」で行われる12年ぶりの大規模公演「THIS IS IT」を発表し、完全復活の狼煙（のろし）をあげていたマイケル・ジャクソンの動向を逐一しつこいほど熱くレポートしていた。訃報が届いた直後、TBSラジオから「今日の『キラ☆キラ』は緊急追悼特番にするので、急遽来てほしい」と連絡が。スタジオのある赤坂へと運転して向かう車の中で、カーラジオから流れる湯川れい子さんが選曲した「ヒューマン・ネイチャー」を聴いた。

もう彼がこの世にいない、その事実に打ちひしがれた僕は、車を路肩に停めて号泣した。空港や、出待ちで「ファンとして会う」ことはしたくなかった。あくまでも、ひとりの日本人ミュージシャンとして、「友人」として出会いたい、とずっと願っていた。

これは歴史的な事実と言っていいので、風化しないように記しておきたい。実はそれ以前、十数年の長きにわたり、マイケルの音楽やパフォーマンスの素晴らしさ、人間性は、様々な

この続きは本誌でどうぞ！